

第二期 第六十二号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2021. 09. 20 定有堂書店 発行

このもの性

汽水のほとりから (6)

「家」物語

電話が鳴っている日記

「深い学び」をめぐる

「奇跡の星」地球

八代日記 (十八)

蔵書目録の逸楽

鳥取あれこれ その六十一

名曲と向きあふ為にⅢ

只でも要らない

いつかこの場所を旅立つ私たちへ

野球とかちわり

紙の本、デンシノホン

……

編集後記



奈良 敏行

小原 修治

萩原 俊郎

鳥居 貴彦

松田 裕史

芝野 浩貴

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

秦阜 梅林

古賀 啓三

三浦 永理

あきの素生

ドラメラア

## このもの性

奈良 敏行

(定有堂 店主)

暑い日がつづき、しばらく姿を見なかったTさんが、散歩の途中だと定有堂に立ち寄り、近況を交換し合った。Tさんは「最近死ぬことばかり考えている」と口にした。一瞬ドキッとしたが、『生物はなぜ死ぬのか』という本を読んだ、という話題だった。こういうテーマは好きなので、話が弾んだ。

簡単にいうと、進化の時間軸で考える、ということだ。生命は、限られた地球上の物質を再利用しながら、持続している。そのため、消え去るものもあるし、いつまでも残りつづけるものもある。この摂理を解き明かす本だ。死によって意識は失われるが、その意識をかたちづくり、形的に支えていた物質は、細いけれどもつながっていく。しかしなんだかんだいっても地球はいつかは解体していく。消えていくものは、地球という形態であり、その素になる何かは、宇宙のチリとなって銀河の中に残りつづける。い

ずれその銀河も消え失せる。消滅ことにカテゴリーが上昇し、やがて全宇宙規模のできごととなる。そこからどうなるのだろうか。

物質と反物質というものがあるらしい。すべてが対になれば、宇宙全体が消滅する。まったくのゼロになるのか、隣の次元（マルチバース）に染み込んで、引越してしまふのか、それはわからない。でもわたしたちの宇宙（ユニバース）は、折りたたまれて消滅する。結局ここには、どう考えてもわからないものが、横たわる。この「わからないもの」とは何だろう。「生命システム」について考えはじめると、いつもこのように堂々巡りをしてしまう。

人は自分の心の中に定形できない現象をかかえると、とりあえず何らかの「秩序」を描き出そうとする。推論の一種だが、そのこころの動きを「アブダクション」という。仮説的推論のことだ。人に尋ねたり、本を読んだりして、この推論を更新していく。しかしいつまでもここには正解がない。でも生活者としてのわたしは、「なるほど納得」と腑に落ちる状態に自分を保持できれば、それはそれで笑って死ねる。

アブダクションの一つだが、タマゴが先かニワトリが先かという設問がある。これは後先の問題ではなく、次元の違いということらしい。タマゴは系統発生の視点、ニワト

リは個体発生の視点。タマゴの方が次元は高い。ちなみに「意識」も、個体と次元を異にする、何ものかだ。生命システムには次元の階層がある。個体の中で、階層を上げて、「心」が生まれる。心（意識）も、タマゴから見れば派生物だ。このように、階層を重ねて形成される意識の世界を、「環境世界」というらしい。木下清一郎『心の起源』から学んだ知見だ。

生物はなぜ死ぬのかという問題だが、築かれた環境世界は、足元（物質）から更新されていく宿命にはない。ニワトリはタマゴへとリセットされていく、という仕組みに、この世界がもともとそうなっている、というだけで、それだけのことだ。ただ個体存在としての自分自身は、少々残念な名残惜しい気持ちも、そこにある。

この残念な思いをどうすればいいのだろうか。そんなことを考えていたら、「このものの性」という言葉に出合った。『湯殿山の哲学』で知った山内志朗の、キーワードだった。もう一つの彼のキーワードは、「ハビトウス」だ。先祖が山伏というスコラ哲学者で、二つの次元に半身をおいているのがおもしろい。

「このものの性」って、「環世界」と言ってしまうのは、あまりにアブダクション的理解だろうか。タマゴとニワトリでいうと、ニワトリだ。本当のところ、この「このも

の性」という言葉は、わたしには理解できない。でもなんとなく気になって、関連本を十冊程度読んでしまった。結果、わからなくてもいいような気がしてきた。わたしの、山内志朗のエッセンスと思ったのは、『新版 天使の記号学』だった。そこに「このもの性」という深淵」という一節があり、なるほど「深淵」というのが述語だったのかと思いついた。わからないけど手の内でこの言葉を磨きつづければ、その先に笑って死ぬる青空が開けるような気もした。

2021. 08. 15

(参考)

- 小林武彦 『生物はなぜ死ぬのか』 講談社現代新書 2021  
木下清一郎 『心の起源』 中公新書 2002  
山内志朗 『湯殿山の哲学』 ふねうま舎 2017  
山内志朗 『天使の記号学 新版』 2019

太極拳教室（会場 定有堂二階 葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室 「読む会」 （岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

## 汽水のほとりから (6)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

東京オリンピックが終わった。

緊急事態宣言下の異例の開催で、しかも感染は日を追うごとに拡大した。が、政府は両者に関連性は認められないと最後まで言い続けた。それはよしとしよう。けれども、いやしくもオリンピックを平和の祭典だというのなら、8月6日は広島島の平和記念式典に合わせ、一斉に黙祷し、原爆死没者追悼を世界に向けてアピールすべきであった。それとも、これもまた関連性は認められないと言うのか。

報道によれば、秋葉忠利前広島市長は、原爆投下時刻に合わせて各会場で黙祷するよう求める署名活動を行ない、集まった約一万六千人分の署名を主催者側に送付したが、実施しない方針を国際オリンピック委員会で決定した旨、大会組織委員会から回答があったという。が、バツハ会長は開催前に広島を訪れて黙祷しており、働きかけ次第では実現したはずだ。とはいえ、初めから政府にその気がなかつ

たことは、会長招待に動いた広島市と県がその際の警備費の負担を国側に求めて拒否された一事でも分かる。

こうしたニュースを見るにつけ、思い出すのは、一昨年亡くなった批評家の加藤典洋のことである。デビュー作『アメリカの影』(河出書房新社、後に講談社学術文庫、現在は講談社文芸文庫)に収められた「戦後再見―天皇・原爆・無条件降伏」で彼は戦後の日本を考える上で一つの重要な指摘を行なった。それは、日本政府が原爆の使用についてはスイス政府を通じて米国に抗議文を提出したのは戦前戦後を通じてただ一度きり、すなわち原爆投下直後の8月10日だけだ、という事実である。しかも、このただ一度きりの事実さえ、「これは当時交戦国として新型爆弾の使用が国際法の原則および人道の根本原則に反するものであることを主張したのであって、交戦国という立場をはなれて客観的にみるならば必ずしもそう断定することはできない」と、戦後の日本政府は抗議内容を取り下げるような発言までしている。右の発言は、原爆被害者五名が国を相手どり、米国およびトルーマン元大統領に損害賠償を請求した裁判の判決、すなわち原爆投下を国際法違反とする63年の東京地裁の所謂「原爆判決」を受けてのものであり、請求は棄却されたが、この判決が被爆者援護法の制定などへ道を開いたことも加藤は詳しく注記している。

それから三十年後、彼は『戦後入門』（ちくま新書）の第三部「原子爆弾と戦後の起源」の中で改めてこの裁判に言及し、「ほんとうは、日本政府がやるべきことを、誰も政府に求めず、政府もこれを行わないというなかで、被爆者自身が自ら立ち上がって国際社会に向けて提起した画期的なコミット、訴えでした」と述べたが、こうした政府の態度は一言でいえば「対米従属」ということになる。

無論、その背景には日米安保の問題がある。加藤は今年出版された遺著『9条の戦後史』（ちくま新書）の中で、「私の判断では、憲法9条の問題は、あるときから、9条と自衛隊の相補性が問題であるという次元から、9条と日米安保の相補性が問題である次元へと変わっています」と述べ、冷戦終結後、安保の存在理由が自国防衛から米国への軍事協力へと変わった為、その無限譲歩を抑止する役割を図らずも現行憲法が荷なうことになったと論じている。

加藤はかつて護憲派を批判し、安保解消に向けて憲法を見直す立場だったが、自民党が憲法改正を進める理由が、集団的自衛権の閣議決定で明らかになように、自衛隊の違憲解消よりもむしろ米軍への軍事協力という色合いが濃く、「対米従属」の傾向が強まった為、本気で平和を望むなら現行憲法を活かして対抗すべきと主張するようになった。

「対米従属」の強化については、憲法史学者の古関彰一

も『対米従属の構造』（みすず書房）の中で、「安全保  
障の視点から見ると、その根源にあるのは、軍事力  
という力であり、対米従属とは対米軍従属であることに気  
づく。と同時に「憲法の安保への従属」を意味している」  
と述べ、加藤と同じように、日米安保は日米同盟と呼ぶべ  
きものに変貌を遂げてしまったと見ている。今や米国大統  
領が開戦を一たび宣言すれば、自衛隊は同盟軍として戦地  
へ赴かねばならず、日本が戦争当事国となる危険性も高い。

ドイツでは、自国の戦争犯罪に対する反省から、「自身  
および第三者の人間の尊厳を侵害する命令」や「国内法お  
よび国際刑法により犯罪となる命令」には従わなくてよい  
とする兵士の「抗命権」を軍人法で定めているが、自衛隊  
法にそうした条文は存在しない、と山崎雅弘が嘆いている  
（『沈黙の子どもたち 軍はなぜ市民を大量殺害したか』  
晶文社）。とはいえ、9条こそ、あらゆる戦争は犯罪行為  
であるとの認識のもと、国家による戦争加担命令に対する  
国民の言わば「抗命権」を保障した条文であろう。戦後の  
日本に徴兵制が無いのも本来そういう文脈だったと思う。

## 「家」物語

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「ステイ・ホーム」が叫ばれながら、日本は今や空前のキャンプ・ブームだという。私が20代の頃もそうだった(アウトドア・ブームと呼ばれた)。「おしゃやかな野外料理」「おうちでキャンプ」といった、いささかヤワな今のブームとは違い、当時はトレッキング、バイク、カヌー……バックパック一つで遊牧民のように旅して暮らすのがあこがれだった。そんな影響もあって「自分は一生、家はいらない」、そう思っていた。

ところが、就活も終えた大学4年のある夜、京都の四条河原町を歩いていると、手相占いの男に呼び止められた。

「今夜はさっぱり客が来んのぞ、お兄ちゃん、タダで見えてあげるわ」。なんだ、ヒマつぶしか……と思いつながら手を差し出すと「ありや、あんたは将来、家を3軒持つことになるぞ」。この手のどこにそんなことが……とあきれながらも「おおきに。でも、おじさん、僕は1軒も家は持たないか

ら」と言って別れた。

鳥取に就職し、結婚して子供が生まれても、ずっと借家かアパート住まいだった。しかし30代半ば、急にログハウスが気になり始めた。世のブームがあつたにせよ、ぜいたく極まりない買い物である。本屋で関係の雑誌を立ち読みしては、ため息をついていた。そんなある夜。

「ログハウスを建てたいから、すぐ土地と施工業者を探して」。小学校を退職した母親からの電話だった。なんでも「赤毛のアンのような家」が少女時代からのあこがれで、そこで孫たちとのんびり過ごしたいという。「なんてこつた」。結局、私も出資して、共同所有で大山にログハウスを建てることになった。ただアパート暮らしは続け、定年後そこで暮らそう、くらいの考えだった。

ところが人生、転がり始めると「ライク・ア・ローリングストーン」である。数年してひよっこり3人目の娘が生まれ、さすがにアパートでは手狭になった。

ある夜の会合で隣がたまたま建築家だった。「よし、設計は任しとけ、ローコスト住宅なら何とかなる」。だが、当時は住宅金融公庫で借りるにも頭金(建築費の約2割)がいる時代。そんな金はどこにもない。

すると、それまでピンシヤンしていた義父が急死、ちょうど頭金ぐらいの遺産の一部がカミさんに転がり込んだ：デュランの歌ではないが、まさに「どんな気がするかい？ (How does it feel?)」じゃあ。

そんなこんなで、新居が完成した。すると「家を建てると転勤」という社内のジンクス通り、今度は大阪に転勤が決まり、大阪の単身アパートも含めて、気がつけば手相占いの予言通り「3軒の家」を持つことに：何が「僕は1軒も家は持たない」だ、よく言うよ。

◇ ◇ ◇

その後も仕事で鳥取、東京と渡り歩き、「3拠点生活」は途切れなかったが、やがて近づく老いの足音。老後を生き抜くには人生の重荷をいかに整理するか、である。

大山のログハウス、倉吉の本宅とも四半世紀も経てば傷みが目立つ。年金生活に入れば、とても両方の維持は無理だ。「残念だが、大山は売るしかない」。大金をはたいて修理し、不動産屋を介して売却の手はずを整えた。

そんな折、同じ別荘地内で営業中の「一棟貸しの別荘」があるのを知り、事態は急展開する。運営会社は私がいた東京の仕事場のすぐ隣で、これも何かの縁と「私のログハウスを使いませんか」とメールすると、「売るより一緒にやりませんか」という返答。そうか、その手があった。

予約や宿泊代の管理、清掃やシーツ交換の業務は運営会社がやり、こちらは客が気に入るサービスや設備を整える。今まですつと家族や友人たちと楽しんできたログハウスのので、そこは心配ない。自分が泊りたい日や客がない日は、今まで通り自由に使える。

コロナ禍で宿泊客はまだ少なく、インバウンド客もいないが、維持費を賄って余りある。その収益で大山、倉吉双方の傷んだ所を直し、ペンキを塗り、DIYで手を入れるのも楽しい：実は私の正体は「1軒の家も持たない」どころか、「家が大好きな人間」だったのである。

映画「エンゼル・ハート」で主人公のミッキー・ロークは、ルシファー（悪魔）のロバート・デニーロから告げられる。「欲望に魂を売ったお前は、自分自身の正体も長く忘れていたが、これこそお前が招いた結末なのだ」。母親からの電話といい、義父の急死といい、貸し別荘との出会いといい、あの占い師のおっさんは四条河原町のルシファーだったのかも知れない。「言った通りになっただろう。さあ、最期に魂を私に渡せ。それがこの世界の約束だ」

# 電話が鳴っている日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

保育園へ行く途中の道端にお地藏さんがいる。ほこらのついた立派なやつ。時間がない時に限って三歳児は「うーとーとーするー」と言う。「まんまんちゃんあん、な」と軽く訂正しながら手を合わせる小さい背中を見ている。沖縄の言葉と京都の言葉が交錯したわけのわからない祈り。満足げに「した」と言って歩き出す三歳児。

出版社に電話。最近はずながるようになってきた。数ヶ月前は自動音声で「感染拡大防止のため…」とか言われファックス番号を聞かされるだけの版元が相当あった。うちにはファックスがない。電話がダメなのはわかる。命、大事。でもだからと言ってファックスで、ってなんなんだ。いや別にいいけど。いいけどなんなのよ。この納得のいかない感じどうしたら。感情を抑えてお問い合わせフォーム

にメールをしてみたこともある。三日ほど経ってから戻ってきた返信には「ご注文はファックスでお願いたします」と書かれていた。ファックス信仰。この業界だけなんだろうか？ それともこの国の？

定休日。昔働いていた本屋が人手不足だと言うのでしばらくバイトをすることになった。レジに立つ。何も考えなくていいのでとても気楽だ。黙々と返品を作る。知ってるお客さんがきたらただら話す。レジの電話がなる。出てみるとおばあさんだった。何を言ってるのか釈然としない。どうやらここを古本屋だと思って電話してきたらしい。で、本の買取をしてくれないか、と言うことらしい。たぶん。ここは新刊書店なのでそういうことはやってないんですけどね、ぼく行きますよ、と言ってみる。今度は相手が混乱している。

約束した日、待ち合わせ時間に少し遅れて教えられた住所についた。でかい家。通された九畳の間には亡くなったご主人の蔵書がいっぱい詰まっていた。古い雑誌を見せてもらおう。「これが私の生まれた家です」と表紙を指差すおばあさん。銚町生まれのお嬢さん。下鴨のお屋敷に嫁いで、主人は一高を飛び級で出て大学に勤めてね、今でも月命日にはお寺さんまでお墓参りに行っています、と言う。

ここにある本たちを少しずつ売っていけば古本屋が数ヶ月は生きていけるんじゃないか、と思う。

満月の日曜日、LINEのテレビ電話が始まった。画面の向こうには大きな仏壇。マスクをした男たちがウチカビを燃やし始める。バケツのような器に次々と投入されるお供えの花や線香。最後にゾロゾロと外に出てウークイの儀式が終わった。スマホに向かって手を合わせるのはなんだか変なのでそこまではしないが、遠い島の先祖のことを少し想像してみる。京都にいながら沖繩の旧盆に参加できるようになったのは技術の進化だと思う。でもそれで満足するようになったら人間としてはかなり退化しているのではないかと思う。

スマホを覗き込みながらたどり着いた場所には二回目以降もスマホを頼りにしないと絶対に行けない。なんとなくの勘でたどり着けた場所には次からは何も見なくてもいける。技術が進化すればするほど身体は退化している。

うーとーには続きがあるのではないかと勝手に思っている。うーとーとーうーとーとー海砂利水魚の水行末雲来末風来末…みたいな。あるいは、いーやーやーこーやーやー

せーんせいにいーゆーたーろーとも似ている。あれは歌なのか。そんなことを考えながら隣の町内の地藏盆に紛れ込んだ息子を見ている。炎天下に響く長い長いお経に頭がぼんやりしてくる。これは歌なのか。なーむーあみだーぶーつーの合唱。いや合掌。すぐに飽きると思っていた子は最後まで真剣な顔をして提灯の下に座っていて、ご褒美のジュースをもらって走ってきた。お坊さんの乗ったタクシーを見送りながら「今日は特別長かったんちゃうか」「全部盛りやっとな」とおじさんたちが話す。そのセリフ、毎年聞いている気がします。

四条通には録音されたコンチキチンが響き、甲子園では事前に収録された応援歌が無人のアルプスに流れる。意識が遠くなりそうな蒸し暑さも、サンゴの海を渡ってくる海風も、遠くの友人に送りあうことはできなさそうだ。まだ、今のところは。

# 「深い学び」をめぐる VIII

松田 裕史

(高校教員)

古田徹也著の『言葉の魂の哲学』は三年前の発刊当初から気になっていた本だ。気が向いたときにパラパラと読む程度でどうしても本腰を入れて通読できずにいた。本の中で焦点があてられている(読みづらい)ウイトゲンシユタインをずっと避けてきたことが理由の一つだが、読みだしてみるとそのウイトゲンシユタインの言説もすんなりと頭の中に入ってくるのは驚きだった。古田はスイスの時計職人を思わせる精妙な手つきで論を積み上げていく。読者は無理なく、思考のダイナミズムに身を委ねることが出来る。

この本のテーマは次のように書いてある。「言葉に魂が入ったように表情を宿し始めること。ありふれた馴染みの単語がふと胸を打つこと。言葉の独特の響きや色合い、雰囲気といったものを感じる。あるいは、それらのものが急に失われ、魂が抜けて死んだように感じる。――そうした体験をどのように捉えればよいのか。また、そうした体験は我々の言語的実践にとって、ひいては我々の生活

や社会全体にとって、いったいどのような重要性があるのか。」この問いには古今東西の文学者や哲学者が取り組んできた。その全てを知っているわけではないが、例えばロシアフォルマリズムの「異化」の概念は地域と時代を超えて普遍性があり、古田の思考とも親和性がある。(個人的には大江健三郎の『新しい文学のために』でロシアフォルマリズムのことを学んだ。)しかし、あらためてこの問いに答えようとするには相当の覚悟や度量が必要なはず。過去の言説をなぞるだけでは誰も見向きはしなかつただろう。ウイトゲンシユタインの言語論とカール・クラウスの言語論を重ね合わせることで古田はこの古典的な問いに新たな光を当てること成功している。

ウイトゲンシユタインからは特に「言葉の立体的理解」と「言葉の場」という二つのアイデアを抽出している。「我々は個々の言葉を、多様な側面から構成される立体として把握することができる。より正確に言えば、我々はまず、類似しつつ別の意味をもった様々な言葉を順に辿っていく。そして、それらを見渡すことによって、そこに一個の有機的全体を見る展望が得られる。すなわち、多様な意味を側面や背面にもちながら、そのつど特定の意味が前面に立つ多面体それ自体として、言葉の輪郭を捉えることができるのである。」これが言葉の立体的理解である。「言葉

が他の多様な言葉と結びつきながら、生活のなかの多種多様な場面で用いられるその広がり、特定の文脈や関心の下でそれがへしつくりくる言葉へと収束していく現場」、これが言葉の場である。

クラウスからは「言葉のかたち(ヴォルトゲシュタルト)」を引いてくる。「クラウスによれば、言葉にはそもそも意思伝達の道具としての働きだけがあるのではない。もうひとつ、かたち(ゲシュタルト)を成すという働きがあり、この働きこそが重要だとクラウスは繰り返し強調している。彼の言語論は(個々の言葉のもつ奥行きや多面性に触発され、その言葉のかたち(ヴォルトゲシュタルト)を把握する」という実践を重視する姿勢によって貫かれている。」

二人の言語論をふまえ、古田は「道徳的な贈り物」として言語を捉えなおす。「我々に受け継がれた文化遺産としての言語には、無数の多義語が含まれ、互いに複雑に連関し合っているということである。(へしつくりこない) (どうも違う)といった迷いは、類似した言葉の間でしか生まれない。我々は、迷い、ためらうことを可能にする言語を贈られているのである。」そして、言語論を象牙の塔に押し込めておくのではなく、現実読者を連れ戻す。「世界が不確かさに覆われつつあるように映り、不安や孤独に襲われたとしても、我々は言語不信に陥って誰か(マス・メ

ディア、カリスマ、独裁者)の言葉に身を任せるのではなく、言語の可能性をこそ信頼し、言語の豊饒さによって触発される「迷い」を「贈り物」として祝福するべきではないのか」「少なくとも、国籍、人種、民族、性別、政治的信条に関して、紋切り型の言葉で敵意や差別意識を拡大させる流れを黙認したり、自らもその流れに飲み込まれたりしないためには、(言葉を運び取る責任)を自覚し、これを果たすことが必要である。クラウスやウイトゲシュタインの生きた時代だけでなく、むしろいま現在こそ、「言葉の実習」を始め、継続することが肝心なのだ。」「ここまできると大村はまを思い出さずにはいられない。(言葉の実習)を優れた教育実践として行ったのがまさに大村はまだ。

教育ツールは大村の時代に比べ格段に進歩した。しかし、教育実践が言葉の実習たりえている国語や英語の教員がどれくらいいるだろうか。

(参考文献)

- 大江健三郎 (1988) . 『新しい文学のために』 岩波書店  
大村はま (1996) . 『新編 教えるということ』 筑摩書房  
古田徹也 (2018) . 『言葉の魂の哲学』 講談社

# 「奇跡の星」地球

→オリオンピック星って存在するの？

芝野 浩貴 (地球探検家)

Voz de Seda というのは、スペイン語で「絹の声」という意味である。その異名を持つラテン歌手の八木啓代さんと南米行ききの船で同乗したことがあり、歌声を披露してもらったが、彼女の活動履歴でも、バックパッカーから始まった初期の頃の「地球の歩き方」の執筆者でもあることに刮目していた。その時は、国立天文台研究員の伊東昌市氏の説明で、星の見方を学び、肉眼で天の川銀河やマゼラン星雲を観察した。チリではアルマ望遠鏡がどう凄いのか、視力6000について、乾燥した砂漠だから観測しやすいことなど伺った。世界各地の望遠鏡のコラボ(宇宙観測オリオンピック)の成果が、ブラックホールの渦の観測を可能にしたことは記憶に新しい。(すばるは視力1000!で、富士山頂に置いたコインを東京から確認できる精度)

「地球の歩き方」や「るるるぶ」など持参しなくても、スマホがあれば、極や洞窟以外は誰でも旅ができる時代にはなっている。さすがに「るるるぶ」を手にして移動することはないものの、研究すべき「るるるぶ」が出版された。「るるるぶ宇宙」である。宇宙で「見る、食べ

る、遊ぶ」とはどういうことなのか。先日も宇宙飛行士の野口聡一氏が3度目の宇宙飛行を終えて帰還しているが、彼によると、「これからはプロの宇宙飛行士にとつて、民間の宇宙旅行者のトラブル対応も仕事になる」ということだった。ジェフ・ベゾスも宇宙飛行に成功した。海水浴で例えると、遭難者に対するライフセーバーにあたるのだろう。私が「地球探検家」と称したのは、地球なら移動可能だが、宇宙まで行くのは無理だと思っているからである。「宇宙探検家」にはならないだろう。(というかなれない)「脱成長コミュニケーションズ」を唱える思想家は、「賢い人たちの頭脳が地球資源の無駄遣いに費やされるのはどうなのか?」と疑問を呈していたが、ここからは少し「るるるぶ宇宙」から引用する。

○たべる

湯を注ぐだけで食べられる宇宙おにぎり、宙に浮かせると自然と球になるので形操作のいらぬいたこ焼き、福井の高校生が開発した鯖缶などが紹介されている。フードロスの問題や飢餓飽食のバランスやカロリー摂取の正しいあり方の参考になるだろう。宇宙食として採用されるには、

- ①液体や微粉が飛び散らない
  - ②電気系や空気の清浄度への障害が発生しない
- の条件を満たさなければいけないとのことである。

○みる

24年ぶりのスーパームーン皆既月食が2021年5月26日に見られたが、北海道と沖縄を除く地域では雲に邪魔されて見れなかったはずである。生か映像かは別にして、見れた人は赤銅色の月を見たわけだが、知人から異なる視点での皆既月食の写真が送られてきた。たまたま、その時に飛行機に乗っていて機内から撮影された対流圏と成層圏の境界からの皆既月食であった。宇宙の常識は地球の非常識なこともある。高度が高くなれば気温が下がるのは対流圏で、それより上では高度が高くなると温度は高くなる。だから宇宙服の存在が欠かせなくて、なければ凍死というよりも大火傷で死んでしまう。るるぶ宇宙では、月に住めば、まんまるの地球である「満地球」、半月に相当する「半地球」、三日月に相当する「三日地球」を29日周期で観察できるとある。これは地球からの視点を月からの視点に変えたただけなので頭では理解できる。以下は惑星見学のポイント。

〈水星惑星〉

三日月型の天王星を見ることができ。天王星は自転軸が88度に傾いている。糸のような13本の環がある。海王星の見所は、メタンが散乱させる青い光。

〈ガス惑星〉

巨大ガス惑星の土星は、多数のリングの集まりのアルファベット

リングを確認したい。水素とヘリウムのガス惑星の木星では、ガスの動きに注目。場所により、様々な縞と渦とオーロラを観察できる。

〈岩石惑星〉

酸化鉄が多く、赤っぽく見える火星では地殻変動で出来た峡谷が見所。金星では、自転する惑星を追い越す速さのスーパーローテーションが見られる。昼に熱せられた大気が夜に冷却されて動く「熱潮汐波」が動力となるため。硫酸の雲が光を反射するため明るく見える。水星は、鉄とニッケルの固まりで、38億年前の隕石の衝突跡のクレーターが見所。

「下町ロケット」も「宇宙兄弟」も読んだことはない。宇宙施設マップも国内で30箇所くらい提示してあるが、日本科学未来館くらいしか行ったことはない。タンク体積を10倍にしたハイパーカミオカンデも20年代後半にできるそうだ。宇宙の映像はそのまま信じるしかないが、直接は見にいけないだろう。しかし、「深海の熱水噴出孔で生命が誕生したこと」は信じる。金星だと蒸気圏、火星だと水圏。それらに挟まれて、惑星で唯一水のある地球は奇跡の星である。国境や県境は目に見えないが、生命の境界は、はっきりとある。へみんな水の中だ。

「西田幾多郎の近代レンマ学が集合論なら、現代レンマ学は層・トポス・圏論。近代レンマ学は二天文明の激突なら、現代レンマ学は東も西もない惑星時代。なのでオリンピック星は存在しない」

# 八代日記

(十八)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

八月某日

昼休憩に社宅で食事したあとに車で会社に戻る途中、高校生が渡ろうとするのを待つために横断歩道の手前で一旦停止していたら車の後方からドラギャンと大きな音がして、俺のボロ車がついにガタがきて爆発してしもたんかと思つて恐る恐る後ろを振り返ったら後続車に追突されていた。交通事故にあうのは初めてだ。

車を端に寄せて、後続車も着いてきた。降りてきたのは若いお母さんと小学生くらいの娘さんですぐに謝つてらしたので責める気にもなれずササつと警察を呼んで事故の処理をしてもらった。保険屋とも連絡を取り終え、あとは保険屋に任せて今日はお互い気をつけて帰りましょうと連絡先だけ一応聞いて(警察に聞くように言われたので)会社に戻った。

先方は完全によそ見をしていたと自分で言っていたのでこちらの過失はゼロとのことだった。自分も全くよそ見せ

ずに運転できているかというところなことはないので改めて安全運転を誓う。

結構な衝撃があつたようで車もだいぶん凹んでいたし、頭も何だかぼんやりするので念のため病院へ行った。レントゲンを撮ったが骨には異常なし。首と肩に電気治療してもらおう。しばらく電気治療だけ通うように言われる。後々引きづらない怪我だといいが、祖父と叔母は交通事故の後ムチウチの治療中に別の病気で亡くなっているので、何となく気掛かりだ。

八月某日

阿部和重『ブラック・チェンバー・ミュージック』(毎日新聞社)を読み始める。が子どもが邪魔してくるので進まない。フィクションに耽溺したい。

耽溺したいのにもう映画も全然観れやしないので侯孝賢の『風櫃の少年』『冬の夏休み』のブルーレイを衝動買いし、夜中に一人で観てやるんだと思うものの、子どもよりも自分が早く寝てしまふ始末でこちらもまだ観られない。

侯孝賢は新作撮らないのかななどと考えていたら、買っていない『憂鬱な樂園』の方が観たくなってきた。バイクのシーンが観たい。結局あの辺りの記憶から抜け出せない。ああ、台湾にも行きたくなってきた。

八月某日

ようやくケバブジョンソンのニューアルバムが完成した。タイトルは『SOUVENIR VIEWS』スーベニアビューズ。ジャケットのモチーフにした昔の絵葉書にそういう記述があったらしく採用。

盤が家に届いてからウェブショップに新譜をアップ。ちょいちよい注文がきてありがたい。しかし売れている人たちはこの百倍とか一千倍以上売れるわけで、いったいどうなっているんだ。

知人のレコードショップ数店にも配送し置いてもらうことに。面識のなかった古書店の方からも連絡をいただき、CDを取り扱ってくれることになった。ありがとうございませす。

八月某日

メッシがバルセロナを退団せねばならなくなったというニュース。パリ・サンジェルマンへの移籍が決まった。カタルーニヤのファンの人たちの落胆は相当なものなんじゃないだろうか。「のび太」のニックネームを付けられていた前会長バルトメウのめっちゃくちゃな経営がことの発端らしいが、どこまで本当なのだろうか。

八月某日

メンバーとのグループラインに「コロナ、怖いなあ(だからあんまり東京行きたくない)」と感じのメールをするのだがその度に既読スルーされるのが気がかり。もう考えるのも面倒になっているのか、安全だというバイアスがかかっているのか。東京の様子がわからない。

※※※※※※※※※※

ぬるめのお湯に浸かり 幾つもの夢を見る  
あなたの側に座り いつまでも考える  
話はそこで終わり 時間を止めるように  
ただ目の前で流れ落ちてく光

たのしい気分までヘブン 行けばいいのにな  
美しい日々が雪崩 起こせばいいのにな  
押し寄せるブギの波に のまれればいいのにな  
ただ目の前で流れ落ちてく光

(ケバブジョンソン「時間」作詞・杉浦真寛)

# 蔵書目録の逸楽

## ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

誰が言ったことだったか忘れたが、人は自分の本が五百冊を超えたあたりで、蔵書目録を作りたくなるものなのだからである。

中世式に、ノートに購入した順に書き記すだけのものから、カードで整理するもの、現在ならパソコンでエクセル入力、或いは市販のソフトで管理、という方法もある。

筆者も中学生の時、文庫の購入リストを作り始めた。文庫は廉価で、たちまち冊数が増えるからである。正に中世修道院式のものだったが、これを続けたことで、ダブリ買いを防止する一助となった。今も現役で、売ったり捨てたりした時は抹線で消し、常にアップ・トウ・デイトができている。

ただ、千慮の一失で、単行本のリストを作ってこなかったことが悔やまれる。何せ、中高生の頃は、単行本など月

に一冊増えるか増えないかくらいのもの。内容はもとより、買った時のシチュエーションまで頭の中に刻まれている。客注など、清水の舞台から飛び落ちるような覚悟だから尚更だ。書き記すまでもないと判断したのが甘かった。

近頃では、古書店やら、ネットオークションやらをさんざん探して、やつと値頃の一冊を見つけて首尾よく入手を果たし、ほくそ笑んでいると、後になって山積みの本の下の方から同じ本が出てくる、といったことが何度も繰り返されるようになってしまった。かかる事態を十代の筆者は全く予測し得なかったのであった。

自分の蔵書目録は、そういうものであるとして、他人の蔵書や蔵書目録を見るのは楽しいものだ。これも誰かの言だが、あたかも精神のストリップテイーズの如くあり。

著名な学者や文学者になると、没後に蔵書目録が編纂されることがある。文学施設や図書館に寄贈されれば、整理され目録化されるものだが、時間も労力も半端ではないし、近時では、データ入力さえすれば、差し当たって利用に不便はないのだから、わざわざ高い経費を掛けて冊子体を発行することが少なくなった。

してみると、『三島由紀夫書誌』はコンピュータ以前だから首肯されるとして、『幻影の蔵 江戸川乱歩探偵小説蔵書目録』や『書物の宇宙誌 澁澤龍彦蔵書目録』などは、市販目的である所も含め、極めて珍しい部類に入る。一定数のコアなファンが見込めたということだろう。

三島書誌は、著作目録の方が眼目で、おまけのような蔵目は遺族の意向で、かなり強烈なバイアスが掛かっており、とても満足できるものではない。乱歩蔵書もミステリ分野に限定されているので、全体像には程遠い。

翻って、澁澤目録は存命時のほぼ完全な蔵書目録となっている点が素晴らしい。愛書家でも蔵書家でもなかったが、それでも邸内五ヶ所に分散して収むる所、およそ一万五千点、編者の苦勞が忍ばれる。

この本はある、あの作家はない、とつまみ食いするだけでも面白い。村上春樹が一冊だけ（献本だ）。高橋たか子の『誘惑者』は、どんな顔をして読んだのだろう。世代的に考えても、漫画を読む人ではなかったが、たった二冊だけ田河水泡（これは分かるわな）とつけ義春（！しかもガロの特集号だから、リアルタイムで読んでいるということだ。種村季弘あたりの入れ知恵だろうか）が。あと、な

ぜか朝日ソノラマのジュブナイルが二冊と少女少女講談社文庫が一冊（献本ではないようだ）。

ちなみに、三島書誌には漫画として、平田弘史が四冊と、楳図かずおの「復讐鬼人」一冊があった。成程ね、のライオンナップと言えよう。

蔵書目録を読むのは、鍾愛する作家の脳内宇宙を探訪するかの如き高揚感がある。いくら矯めつ眇めつ眺めたとしても作家の手の内が簡単に分かる程、単純なものではないにしても。

ある架空の人物の蔵書目録を完全に創作したら（本は実在のものを使うとして）、その人物の精神の生成過程を表す一種のビルドダウングスロマンのようなものができているかあるまいか。（誰かがもう、やっているかも知れない）骨のパーツだけを並べたようなものだから、（古生物学者さながらに）相当な根気と教養と想像力を要求される訳で、そんなもの、誰が読みたがるか、という話に尽きるのだけれども。

# 鳥取あれこれ その六十一

内田 克彦

(地域研究家)

知人から、二〇〇五年九月二一日付け日本海新聞に掲載された「島田魁の遺品 鹿野に」の記事を教えてもらった。実は彼は新選組のことが好きで、「鳥取出身者がいないのは残念だ」と言うため、二〇一四年発行のあさくらゆう著『新選組を探る』の中で、県立博物館所蔵の『新選組人名録』が掲載されており、それには、「林信太郎」は因州出身と書かれていると伝えると、驚いていた。

因みに、あさくらは「資料発掘の鬼」と異名を取り、二〇一三年大河ドラマ「八重の桜」放送の前年に、『川崎尚之助と八重』を発売し、八重の最初の夫である川崎尚之助の事績を明らかにしている。また、千葉重太郎の妹のさなは結婚しており、相手は元鳥取藩士の山口菊次郎である、との資料を発掘した人物でもある。

知人と県立博物館に行つて、文書の現物を見せて頂いた。『慶応三丁卯年正月ヨリ六月迄 風聞記』とタイトルのある綴りの中に『新選組人名録』があり、確かに「因州

林信太郎」と書かれていた。あさくら著の「解説」によ

ると、この名簿原本の作成時期は「慶応二年一二月ごろ」であり、同等のものが「柳川市藩政資料」にも存在する、とのことで、「原本はおそらく幕府方に提出されたものであるう」、名簿が流出したのは「嶋田魁の妻の実家、丹波屋が鳥取藩の用達だったことも疑うことが出来る材料だ」としている。

この文書が、新選組隊士研究本の中でどう取り扱われており、林信太郎の出身地が、隊士名簿の中でどう書かれているのか、県立図書館の所蔵本に当たることにした。

あさくら著と同年の二〇一四年発行の『新選組史料大全』（菊池明他編）の中の菊池が解説する「新選組隊士名簿（編）」の項で、各種の隊士名簿が載る中で、出身地を記載する隊士名簿が三つ載り、所蔵先の明記はないものの県立博物館所蔵の文書『新選組人名録』も収録されていた。その他に、霊山歴史館所蔵の島田魁の遺品中の、名簿原本の作成時期を「慶応元年六月」とする『英名録』が収録されており、「武州 林信太郎」と書かれていた。

あと一つは、東洋文庫所蔵の『新選組同志連名控』が収録されており、「大坂浪士 水戸街道にて殺害さる 同「浪士調役」 林信太郎」と書かれていた。解説では、

その文書は、『新撰組永倉新八』の中の『新撰組同志連名記』が「活字化される以前に筆写された」ものと記述しているため、一九七二年発刊の、『新撰組永倉新八』の再刊本『新撰組顛末記』を見てみたが、同様に書かれていた。

なお、菊池は、永倉新八の『新撰組同志連名記』について、二〇〇一年発刊の『新撰組大人名事典下』の「隊士名簿一覽」の項の「はじめに」で、次のように記述している。

永倉新八による『同志連名記』は貴重なものではあるが、その点〔在隊時期、あるいは入隊・離隊の時期を知ること〕に関しての価値は高いものではない。なぜなら、『同志連名記』は永倉の記憶等によってまとめられた、新撰組通史上の在隊者名簿だからである。

ところが、菊池は、二〇〇三年発刊の『新撰組銘々伝第一巻』で「林信太郎」を取り上げ、「武州出身で大坂在住者」であるとして、次のように記述している。

〔子母沢寛著〕『新撰組遺聞』に収録されている。

〔八木〕為三郎の述べた信太郎の出自は、「これは大阪の浪人です〔略〕」というものだった。

〔略、島田魁の〕『英名録』には出身が「武州」とさ

れ、永倉が維新後にまとめた『同志連名記』には「大坂浪士」とあるが、「文久三年」五月までという入隊時期から、大坂在住者だった可能性が高い。

また、二〇一一年発刊の相川司著『新撰組隊士録』では、四三種類の名簿が載り、県立博物館所蔵の文書『新撰組人名録』も収録されているが、出身地はこの著に載る名簿からはすべて削除されており、参考にならない。相川は、「林信太郎」の項では「出身 武蔵国」と記述している。

県立博物館所蔵の文書『新撰組人名録』は最近発掘されたもので、未だ評価の俎上に上がっていないと考えたい。その理由は、二〇一四年発刊の『新撰組史料大全』の底本である、一九九三年発刊の『新撰組史料集』の「隊士名簿に見る新撰組の変遷」の項で、菊池は「慶応二年の名簿は発見されていない」と記述し、『新撰組人名録』は収録されておらず、『新撰組史料大全』でも、島田魁の『英名録』との出身地の異同について解説していないからである。

いずれにせよ、林信太郎が大坂近辺で入隊したのなら、「因州出身で大坂在住者」もありうるため、今後、出身地の解明を隊士研究者に望みたい。二〇二二・八・二二

# 名曲と向きあふ為にⅢ―シューベルトとコントラバス

秦阜 梅林

(楽人)

## 序

シューベルトのオーケストレーションを語る上で特筆すべき点の一つに、彼の「コントラバス」の扱ひに「実に天才の閃き」があり、ロマン派的な劇的発想で初めて雄弁に語った事！が挙げられるが、これはかなり地味な観点で有る為か余り認識されてゐなひ。

此の点同じ街、同じ時代を生きた※ベートホーフエンが、ハイドウンやモーツァルトに倣ひバスを極めて古典的な扱ひに終始した(あくまでチエロを歌はせバスはそれに準じ重ねたり沈黙させる)保守性と較ぶるとシューベルトの独創には唸らされる。

シューマン・ベルリオーズ・ヴァグナー・ブラームス・ブルックナー…:ロマンの申し子達は皆、シューベルトが独りせつせと切り拓ひた新しき道を通じて「当然の如く」交響の世界に分け入ったのだ…

## I

先ず、極めて卑近な例では有るが、かの「未完成」口短調交響曲を見てみよう。

スコアを紐解く迄も無く、第一楽章その冒頭、 $\text{C}\text{D}$ をお聴きになつても解るだらう(…地の底から誘ふ? 燃へ盛るハデスからドン・ジョヴァニの招きか?) 不気味な厚ひ低弦の呼び声:チエロ、バスの重ね方のブレンド、絶妙なグラデーション…もし?コントラバス(以下  $\text{C}\text{B}$ )を、此のバス声部から抜き去つたら?あとに残るのは愚鈍で軽薄なヴィオラ、チエロのおならやしやくりのやうな、だうにもしまらなひ冗長なお喋りだけ。

迫力あるバスラインが尽く  $\text{C}\text{B}$  の雄弁な台詞に彩られ見事な劇的效果を上げてゐる。

軽やかなピツィカートのパッセージにあつても、現代ジャズで雄弁を奮ふ、響き豊かな  $\text{C}\text{B}$  のそれは実に際立つてゐる。

## II

ハ長調の「大交響曲」等でも、此の本来の意味での「コントラバス」、つまり低声部に対し更に対峙する(コントラ)最深のバスラインをうまく活かし、次に来るバス・バリトンラインとくつきり使ひ分け、深ひ谷々の響を織り成す色彩感覚はいよいよ牙渡る…。声楽でアルトやバスを巧く使ひ独特な効果をあげた歌王は、こんな風に器楽の世界でも表現のバレットを大胆に拡大し、本格的ロマン派交響の世界は実に  $\text{C}\text{B}$  の雄叫びと共に始まつたのだ…!

## III

そんな斬新なオーケストレーションを存分に愉しめる作品と云へば、何と云つてもピアノ五重奏曲「長調」[鱒]であらう。

先ずその第一楽章、目を引くのは、オルゲルプンクト、バスの持続音である…緊張感漲る、途切れる事無き低音の強さにこれ迄バロック→古典音楽では聴いたことも無かつた新しひドラマの開始が実感される…この「コントラバスライン」を意識させる事で「アルト」(本来の、高ひ)を担当するヴィオラ、更に至高の(「ソウプラ」)ヴァイオリンとの、高低に於る強烈なコントラストが否応無しに強調される…。

やがてバスのピツィカート、軽やかな八分音符は弾けるビートをスウインギーに伝える。溪流をいとも軽やかに遡るこのラフなスタイルは現在のジャズを彷彿とさせ、ポップミュージックの源流が垣間見られる。

#### IV

第二楽章、付点を伴つてオクターヴの跳躍をみせる、上へ下へ…角笛のやうなパッセージの筈はやがて来るブルックナー交響世界への魁であり、此れが暫時自在な転調を繰り返して展開され作品のスケールはいよいよ宇宙へと広がつてゆく…

第三楽章、スケルツォ 再び深いオルゲルプンクトは、三つの付点二分音符との対比で、亦引き締まった速いテムポの中で独特の存在感、雄弁さを奏する…。

第四楽章、その第三変奏でチエロ、バスの低弦は満を待して「鱒」のリートを高らかに謳ひ凱歌を上げる…このやうに超低音のパートからそつと見上げる青春の日の楽曲(22歳)の清新さは実に際立つてゐる。そして、彼方の空に浮かび上がるロマンの曙光を色鮮やかに認むる事が出来るのだ、…誰一人居なひ特等席於て。

2021.08.14

※ L.v. ベートホーフ 1770-1827. F. シューベルト 1797-1828. 共にヴァイーン没

今回のディスク

F. シューベルト、ピアノ五重奏曲 イ長調 作品 114 D. 667 「鱒」(1819)

① ドロルツ Q. K. エンゲル D. G. ヘルトナーゲル Ch (rec. 1964)

② プロアルテ Q. シェナーベル D. C. オドバイ Ch (1935)

③ ヴィーン八重奏団員(W. ボスコフスキー、J. クルムプ他) C. カーン

ン Pf (1957)

④ グリュミッキー三重奏団 I. フラー Pf. カザウラン Ch (1966)

⑤ ヴィーン、コンツェルトハウス Q. P. B. スコダ Pf

J. ヘルマン Ch (1950)

⑥ ボロディン Q. S. リヒテル D. G. ヘルトナーゲル Ch (1980)

⑦ J. ラレード V. R. ゼルキン D. 他 J. レヴィーン

Ch (1967.08.15. マールボロ音楽祭ライブ)

# 口でも要らない

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

も。しかしそれはイメージの元型であって、体験自体について書いてるわけじゃない」

大宰の『人間失格』（英訳の題は No longer human）を読んだが、露悪的でつまらない作品だと思う。これは私小説ということになっているが、全てのエピソードが作者の実体験とは思えない。

そうすると、全ての小説は私体験を元型とする虚構ということになり、あるのは私小説度の濃淡だけであるような気もする。

村上春樹『海辺のカフカ』（私小度3）みたいな。

ステイリー・ダンの曲を聴いていて、全く意味のわからない歌詞というものを自分も書いてみたいと思った。

売り言葉

買い言葉

傘おりたたみ

石畳

雨に濡れ

涙枯れ

姿も変えて

書く材料がないのであれば、断章を試してみたら、と奈良さんに勧められた。

基本的に書くことにしか興味がないので、ここに書くことも書くことについての御託ばかりになってしまい、さぞ読者にも飽きられているのだろうな、と推測する。

今書いている小説で、大学で文芸創作を専修している青年に以下のようなことを云わせている。

「今は自分の出自とか、体験とか、意図的に取り除いている。完全な虚構を構築することが創作する意味のような気がしている。そりゃ、体験からの影響を完全に排除するのは難しい。高級レストランのことを書くこうとすると、親父に連れて行ってもらった何軒かの特定の店の様子が頭に浮かんでしまうし、セックスやその相手の嗜癖なんかを書く場合に

さつきの喧嘩

末期の関係

合言葉

ないことが

別れの理由

抱かれたのは何故

裁かれて当たり前

澄んだ心

済んだ頃

荒んだダンス踊り始める

すんでのところまでコケカケナガラ

コケカケコロビカツコワリイ

括弧付きだし虚仮威し

幽けき勇気も見かけだけ

◇

日本の本社で三年間勤務した際、最も飢餓感を感じたのは庭でするバーベキューであった。所有する、大きめのプロパンガスを使うグリルは、恐らく年を通じて百日は稼働しているんじゃないかと思う。チャコールの方が味はいい

のかもしれないが火が最良の状態に至るまで時間がかかり、年に百回使用する者にとってはまどろっこしくてやっ  
てられない。大抵のことは年に百回すると上達するが、あなたが最も得意なことは何ですか、と問われれば躊躇うことなく肉を焼くこと、と答える。年に百回使うと、大体二年くらいでグリルは潰れる。壊れるのは通常ガスの配管関連で、器用な人なら簡単に修理できるのかもしれない。外見はさほど古びておらず、アメリカだと要らなくなったものは道にFree(無料)と書いた札を貼って置いておけばきっと誰かが拾ってゆく。

先日、コロナで習慣となった家内との散歩の途中、隣人の庭先に車椅子が放置されていた。バーベキューグリルだとなぜ要らなくなったのだろう、などと思い巡らすこともないが、車椅子だと考えてしまう。それもきつと怪我が治って不要になったのだろう、とか良い方にはあまり思いが及びませんね。モノには何か考えの流れを形成する「徴」のようなものがあるんでしょうね。

「主婦」なんてのもフリーと書いたサインが貼って置いてあっても気軽に持ち帰りませんもんね、きつと。どういう徴しなのかは知りませんが。

# いつかこの場所を旅立つ私たちへ

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

何度も繰り返し頭の中に現れるイメージがある。

草原の中に立つ少女。走り逃げる。自由のために、自分の人生のために。そうやって、青空に向かって一人両手を伸ばす。

私はいつも馴染めない方の人間だった。と思っている。背が低くてお勉強もそこそこできなかつた小学生時代。周りの子がバレエとピアノをやっている頃、空手をやる女の子だった。空手教室でいつの間にか私が唯一の女の子だった。関西に住んでいたのに、関西弁がしゃべれなかつた。

みんなが同じ中学に進学する中、東京へと移った中学生時代。東京の人は冷たいと思った。誰と仲良くしたらいいかわからなかつたから、とりあえず笑っていた。この学校には馴染めないという予感が高校の頃には確信に変わった。みんなは私と違う世界の人らしい。

晴れて大学に入った頃になってやっと、私は「馴染めない

い人間」として生きることが割り切れるようになったと思う。

いくらでも馴染もうとすれば、馴染めたはずだった。それに、周りの人も私のことを変人扱いしていたわけではない。今も昔も周りは「まともな」人間だと扱ってくれる。

「馴染めない」は「馴染んではいけない」という恐れの裏返しかもしれない。今、自分がいるところの「当たり前」を疑うべきだ。大きな波になって、誰かを傷つけてはいけない。私は恵まれすぎているから。群れて誰かを笑ったり、誰かを仲間外れにしたりすることも、誰かと一緒にいて楽しいと思いつけることも、同じくらい私にとっては嫌なことになっていた。

ただ、馴染んでいなければ、私はきつと自由でもある。次の場所に行けばいいと割り切つて、進めてしまおう。

「こも、こも、これからも、さようなら。そんな風な人間だから、心の中に走り出すあの少女を思い浮かべている。「私は私だ。」と言う自由のために生きている。

こんなことを思うのは、私だけではないだろうと思う。

それどころか、もっと破壊的に自由でいたいと思う人間は少くない。

そもそも、「仕事をするべき」なんていう社会の価値観から解放されて、自由に生きよう。のらりくらりでも生きていける。社会なんてどうでもいい。

残念ながら、私はちよつと理解できない。ごめんなさい。

こうやって書き溜めているのだから、読んでいる相手がいる。私の文を読む行為を通して、その人の中に「三浦さんは〇〇な人だ」と言うイメージが少しずつできていくと思う。ほとんどの人が私と直接会うことのない人だったりするけれど。

ロジェ・グルニエの『書物の宮殿』（岩波書店）の中では、さまざまな視点で「書くこと」について書かれている。「書くことは、生きることの理由だろうか？」と書かれた帯につられて買っただけで、フランス文学には、何の造詣のない私だが、こんな箇所があった。

「矛盾の果てには、沈黙への誘惑がある。なんのために書くのか？ だれのために書くのか？ 意思を通じ合う必要を感じることなく、作家でいられるのだろうか？」

いつも文章を書いているとき、私は自分が馴染んでいないことを実感する。一方で、私はまだこれだけの自由を手を持っていて、それを表明するだけの言葉も持ち合わせているのだという安心感もある。

果たして、私はこの言葉だけで、自分のことを理解してもらいたいと思っているのか？ それともその逆では？

本当に重要なことについて私は沈黙し続けるだろう。それが私の自由のためであって、いつかこの場所を旅立つ本当の理由だから。

だから、皆さんに私のことはわからないし、私も皆さんのことはわからないのです。ごめんなさい。

それでもこうやってやり取りできるのは、言葉のおかげですね。ありがとうございます。

『書物の宮殿』の中では、作家の「私的な日記」の話が出てくる。グルニエによれば、作家達の手記は多くの人たちに見られることになるし、そうなることを見越して、「日記を書いていく」などと嘘をつく輩もいると。

この本を読み終えた時、私は作家自身の計報を目にしたのだが、真っ先に考えたのは、彼の日記の行方であった。

# 野球とかちわり

あきの素生

(くうねるめがね)



高校野球が好きなのは、と気づき始めたのは、中学三年生だったと思う。たまたまテレビに映っている試合を見始めたら目が離せなくなり、試合後に、はたと、今、自分は夢中になっていたな、と気づいた。何度かそんなことを繰り返し、高校野球が好きなのだと自覚するに至った。

夏になると(いや、春もだが)、ウー、というサイレンが聞こえてくるなど小さい頃からうつすら感じていながら、それが何なのか追及することはなかった。初めて子どもだけで電車に乗り、祖母の家まで行った夏休み、駅まで迎えに来てくれた祖母が、近くの喫茶店でかき氷を食べさせてくれた。明るい店内にあのサイレンが響いていて、夏の心地よい記憶として残っている。高校野球を好きになってから、ああ、試合が始まるとか終わるとかするタイミングで鳴らされるもので、高校野球にまつわる音なのだなどと遅ま

きながら認識した。

高校生になると、高校野球に対する思い入れは年々増していった。一試合一試合懸命に取り組む姿が、テレビとはいえ間近に見られて、自分が手放したものに触れていられるような気がしたのだろうか。徹底するということは得手ではないが、夢中になるのは比較的容易だ。ただ、なかなか正攻法とはいかない。正攻法も得手ではないのだ、きつと。

まず、通っていた高校に野球部がなかった。マネージャーとして高校野球に携わる道は初めから閉ざされていた。地方大会の応援席で、ブラスバンドの演奏に合わせてメガホンを振り、声を限りに歌う道も。それでも、高校野球を追いかけて続けた。「栄冠は君に輝く」はむちゃくちゃいい歌だな、と思い、誰もいないところで口ずさんだり、うちの校歌、甲子園に似合うと思うんだよな、と思い、誰もいないところで口ずさんだりした。高校球児の腕は鍛えられているだけあり、肘から下の部分、いわゆる前腕に、くつと筋が入る。この、くつと入る筋が格好良いよな、と思いつきま時間を見つけて、筋トレに精を出したりもした。クラスメイトから「〇〇イコール筋トレってイメージ」と評されるほど、ワークアウトしていた。くつと入る筋は、

そんなすきま時間でたやすく手に入るほど、甘いしろものではなかったが。

そんな高校時代、夏の全国高等学校野球選手権大会で、開会式、閉会式の司会や国歌斉唱等を地元の高校生が担うという方針が出された。兵庫県の高校生になりたい、と切実に思った。野球部でなくても、高校野球にかかわることができるとは。とはいえ、兵庫県の高校に転校するほどの行動力もなく、三日くらい熱に浮かされたのち、焦燥や衝動は影を潜めて、野球部のないわが母校に通い続けた。

その焦燥と衝動が再び頭をもたげたのは、高三の夏だった。高校生でいられるのは今年が最後なのに、甲子園に行つたことがない。こんなに高校野球が好きなのに、高校時代に甲子園に行かないなんて、一生後悔するんじゃないのか。そう考えだすと、いてもたってもいられず、日帰りで甲子園に行くことにした。

駅から甲子園球場までは、たくさんの方が歩いていて、そんなに距離はない。まるで参道のような。自分の行いに、当時名前を付けることはなかったが、今思えば「聖地巡礼」というのがぴたりと当てはまる。球場が近づくとつれて、気分が高揚すると同時に、なにか人見知りするような、照れくさくて俯きがちに押し黙ってしまうような、そんな

気持ちになったのを覚えている。

球場に入ると、目の前に広がったグラウンドとスタンドに圧倒された。あこがれの場所に立つた感動もあっただろう。よく晴れた日で、球場の上の青空が、より一層解放感をもたらした。観に行つたのは大会何日目だったか、一回戦の四試合が行われる日だった。いつもはテレビで大写して見ている試合をスタンドから観るのは勝手が違ったが、その場の雰囲気や熱気を感じながら観戦するのは何とも楽しかった。

そして、甲子園に来たら絶対に食べようと思っていたのが、かちわり氷。ここぞとばかりに“甲子園らしさ”を満喫するつもりだったのだ。が、かちわり氷は食べることでできなかった。混みあつた観客席で、遠くを歩く売り子さんに声をかけられなかったのだ。これは一生後悔案件かなど当時は思つたけれど、こんな後悔なら、ぶら下げて引きずっているのも悪くない。

先日、全国高校女子硬式野球選手権の決勝戦が初めて甲子園で行われたというニュースを見た。素敵なことだ。

# 紙の本、デンシノホン

ドラマリア

(座敷わらし)



「電子書籍元年」と呼ばれた年があった。調べてみると二〇一〇年のことだったようで、なんとかれこれ十一年も前のことなのだ。「自炊」と呼ばれる行為が出現して、周囲にも大型の裁断機とスキヤナを買い込んで手持ちの雑誌をすべて電子化した猛者がいた。

そこから遅れて、わたしにとつての「電子書籍元年」は今年だった。きっかけは「合宿」だ。暇を持って余すのは明らかだが、あらかじめ持ち込める荷物の量にも外部からの供給にも制限がある、さてどうしよう。となつて導入を決めた。幸いなことにわたしが滞在した県内最大・最先端の施設はWiFi環境も整備されていて、自分の端末にアプリを入れるだけでスムーズに利用できた。

いざ使い始めて慣れてくるとやはり便利などころもある。特に持ち運びの負担の少なさや省スペース性は大きな利点だ。年々増えていく本にいったい家賃をいくら払っている

のか、と震える身としてはありがたい。一方、工夫を凝らした題字や表紙の手触りを堪能できず、紙好きとしては物足りないというか寂しい。また、作品だけを(端末の貸し借りなしに)誰かに気軽に貸すことは難しく、これはわたしのように好きな作品を布教したい人間には大きな障害だ。結局、わたし自身も電子に完全移行することも電子ゼロに戻すこともなく、使い分けてやっていくのだろう。世の中全体もそうで、紙の本はまもなく「絶滅」すると当時騒がれたが、もう少し時間がかかるように思う。その時が来るまでは、この冊子も紙で作られて、多くの本や雑誌たちの隙間を泳いでいくのだろう。



・編集後記……

このところオムライスから遠ざかっています。かなしい。持ち帰りできるお店もあるけれど、そういうことじゃないんだ、雰囲気も含めてなんだ(力説)。

ドラマリア(編集長)

「いつているあいだにも、世界は端から欠けていく。風の吹くたびに崩れていく」(『鏡のなかのアジア』)これはとても時代の感覚に思えた。

奈良敏行(発行人)